九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（三）

日高，愛子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19509

出版情報：文獻探究. 47, pp.39-55, 2009-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（三）

日高　愛子

四十五号・四十六号に引き続き、今号では巻十九雑躰から巻末までの翻刻を掲載する。猶、凡例については四十五号を参照されたい。

翻刻

第十九　雑躰　此巻　色々ニあれは也ましふる心也

一短哥の事長哥とも云也やかて当集ニそのなかうた冬の長哥ともあり俊成卿千載ニ短歌と書るゝ定家卿心ゆかすと也卅一字の哥も花の題にて始中終花の事をよむなれは長哥と云へき也短哥とは一句〳〵ニ書切なれは短哥と云也

読人しらす

1001 一あふことのまれなるいろにおもひそめ　異義なしかくなはとは奈良ニ正月の祝ニ用るあふら物のやうにて網（アミ）のことくもちれたる物也みたれたるいはん為也けなはけぬへくとは消は消よと也えふのみなれはとはゑんふたいにむまれたる身と也たきつ心とはたきつたる心也人しりぬへみとは人のしるへくと也すみそめのとはゆふへいはん為也せむすへなみにはにいてゝとはせんかたなく庭にいつる也

【校異】けなはけぬへくとは消は消よと也―＊　えふのみなれはとはゑんふたいにむまれたる身と也―えぶの身、閻浮の身也　たきつ心とはたきつたる心也人しりぬへみとは人のしるへくと也すみそめのとはゆふへいはん為也せむすへなみにはにいてゝとはせんかたなく庭にいつる也―＊

1002 ［1002］ 一もくろくのそのなかうた　目録序の長哥也其と一説不用

つらゆき

一ちは（羽）やふる神のみよゝりの哥　たてまつる哥の事共也あまひこのとはをとはの山いはん為也庭もはたれにとは庭もまたらに也うすき心也やちくさのとは弥千種也中につくすとはつくせとも也大宮にのみとは禁中也久かたのひるよるわかすとは空よりあけくるゝ物なれは也

【校異】あまひこのとはをとはの山いはん為也―＊　庭もまたらに也―＊　ひる

よるわかすとは—＊

1003 **壬生忠岑**

一くれ竹の世ゝのふることなかりせはの哥　たてまつる哥の事共也のはへましとのへましと也ちりにつけとやとは跡をつく事也くひすを継心也けたものゝ雲にほえけんとは雲の上まて君かよけいにて殿上ニのほる事也忠岑集ニこれもおもへはいにしへのくすりけかせしけたものゝとあると也御家の説ニあらす（＊）ちかきまもりとは左近衛の番ちやうなりし也たれかは秋のくるかたにとは右衛門府生西の方ニなるを思はしくも思はぬ也あさむきいてゝとは浸（ヲカサレ）たる心也おさ〳〵しくもとは浪をおさむる也長するわらんへをおさなきと云も長せぬ心也こゝのかさねのとは九重也の山しちかけれはとは内野事也内裏にてとをくなる心也いつゝのむつとは五六卅也此時卅歳は不審也奉公の時分を卅年はかりなるかと也やよけれはとは弥年のよきれはと也（＊）くすりもかとは薬哉と也蓬莱蓬頂延寿山〳〵也

【校異】けたものゝ雲にほえけんとは雲の上まて君かよけいにて殿上ニのほる事也　忠岑集ニこれもおもへはいにしへのくすりけかせしけたものゝとあると也　御家の説ニあらす—これをおもへば君の恵によりて殿上に昇事を云也。これをおもへばいにしへのくすりけがせるけだものゝ、と忠岑集にはこれを入今少ことはりきこゆ。准南王劉安が仙薬を服して昇仙のとき、薬をなめたりし鶏、犬、皆仙に成て雲上に吠たりしと云事也　あさむきいてゝとは浸（ヲカサレ）たる心也—＊　こゝのかさねのとは九重也—＊　の山しちかけれはとは—今は野山し　いつゝのむつとは—つもれる年を　やよけれはとは—老のかずさへやよければ　＊—弥過也　くすりもかとは薬哉と也蓬莱蓬頂延寿山〳〵也—おいずしなずの　蓬莱、方丈、瀛州、仙境。不老不死薬也

1004 **反哥**（カヘシ）

一きみか代にあふさか山のいはし水こかくれたりとおもひけるかな（＊）我身を人しれす思しにめしいたさるゝと云心也

【校異】＊—義なし　我身を人しれす思しにめしいたさるゝと云心也—＊

1005 **凡河内躬恒**

一ちは（羽）やふる神無月とやけさよりはくもりもあへすうちしくれの哥冬の哥也義なしはつ時雨と云本あり不用

【校異】冬の哥也—此歌　はつ時雨と云本あり不用—初時雨、打時雨、両本有。打しぐれを用給也

[1006]

一七条のきさきうせたまひけるとは延喜七年六月八日崩卅六也

【校異】七条のきさきうせたまひけるとは—＊

1006 **伊勢**

一おきつなみあれのみまさる宮のうちにとしへてすみしいせのあまも舟なかしたるの哥　事書にみえたり舟なかしたるとはすて舟也ろかいもなき心也をのかちり〳〵五旬の日数はてゝ人〳〵の別也此心源物ニあり哀なる長哥と也

【校異】事書にみえたり舟なかしたるとはすて舟也ろかいもなき心也—＊　五旬の日数はてゝ人〳〵の別也—五旬すぎて人の分散する也　此心源物ニあり哀なる長哥と也—＊

旋頭哥（セントウ）　上ニカヘル也古ニ満ル心也昔ニ満也　常ノ哥ニ一句アマル也

1007 一うちわたすをちかた人にものまうすわれそのそこにしろくさけるはなにの花そも

よみ人しらす

義なし梅花の事也

1008 ［1008］一返し

一春されは野辺にまつさく見れとあかぬ花まひなし（マイ）にたゝなのるへき花のなゝれや

花もいひなしと也定家卿説ニ略（マイナイ）也引出物なとゑすはとは尋常（シンシヤウヨノツネ）ならすよのつねに名乗へき花の名かと也物にさりけりと云物にそありける也そとあとを略してさを置也あむあみたをなまみたなもあみた通用也まともとも五音也花もひなしを花まひなしとはいを略する也　朗詠ニ昭君若（ヲクラマシカハ）贈一　黄金略（マイナイヲ）一定是終レ身ノ（ツカウマツラン）奉レ帝王ニ

【校異】花もいひなしと也―＊　五音―五音相通

1009 一はつせ河ふるかはのへにふたもとあるすきとしをへて又もあひみむふたもとある杉

つらゆき

1010 一きみかさすみかさの山のもみちはの色神な月時雨の雨のそめるなりけり

二首義なし

1011 一むめの花みにこそきつれ鶯のひとく〳〵といとひしもをる

ひとく〳〵とは鶯の鳴やう也人のくる〳〵と云となり

よみ人しらす

そせい法し

1012 一山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして

義なし

藤原としゆきの朝臣

1013 一いくはくのたをつくれはかほとゝきすしてのたをさをあさな〳〵よふ

しての田おさ時鳥の異名也

藤原かねすけの朝臣

1014 一いつしかとまたく心をはきにあけてあまのかはらをけふやわたらん

事書にみゆはきあくるとはあらはれたる心也またく心とは待心也

凡河内みつね

1015 一むつこともまたつきなくにあけぬめりいつらは秋のなかしてふよは

義なし

僧正へんせう

1016 一秋のゝになまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひとゝき

義なしあなかしかましとはいくほとの事そなうけたまはりそと

誹諧哥

昔ハサレ哥ト云也利ロシタル哥也物イワヌ物ニ物ヲイワセ心ナキ物ニ心ヲツケナトスル事也

也

1017 一秋くれはのへにたはるゝ女郎花いつれの人かつまてみるへき
義なしたはるゝとは女ニたはふれたる心也

よみ人しらす

1018 一秋霧のはれてくもれはをみなへし花のすかたそ見えかくれする
同　女の人ニ見えかくれするやうの心也

同

【校異】見えかくれ—みえつかくれっ

1019 一花とみておらむとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ
同　うたたあるさまとはうたてい名と也

在原むねやな

1020 一秋風にほころひぬらしふりはかまつゝりさせてふきり〳〵すなく
同　つゝりは直綴（チキトツ）のとつ也つゝりはさすともぬふとも云也仏の袈裟にもふんさう衣とて色々の物にて縫（ヌイ）たる物也させてふとはさせといふと也させはきり〳〵すの一名也後拾遺の序ニ秋のむし〳〵のさせるふしもなきとはきり〳〵すのさせ也

【校異】直綴（チキトツ）のとつ也つゝりは—綴也　させ—させて

清原ふかやふ

1021 一冬なから雲のとなりのちかけれはなかゝきよりそ花はちりける
事書ニ見えたり

よみ人しらす

1022 一磯の神ふりにしこひのかみさひてたゝるに我はいそねかねつる
たゝるにとは神のつきたると也たゝるにねられぬと也神さひては恋の神也枕と跡からとせなきたると也

【校異】枕と跡からとせなきたると也—＊

1023 一枕よりあとよりこひのせめくれはせむ方なみそとこなかにをる
義なしせんかたなみとはせん方なくて也

同

1024 一恋しきか方もかたこそありときけたてれをれともなき心ちかな
同　かたもかたこそとは形チ也

同

1025 一ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてそ恋しき
同　心みかてらとは心みにまつしてみんと也

同

1026 一みゝなしの山のくちなしえてしかな思ひの色の下そめにせん
同

同

1027 一あし引の山田のそほつをのれさへ我おほしといふうれはしきこと
山田の僧都はおとろかし也ゲンビン僧都は山田を守し事ありうれはしきとは愁也（＊）

【校異】＊—此物の鳴様、我巨々となる也。水筒におゝくたまる時こぼるゝ、其時、なる声を云也。古文云、富嫌千口廿分実恨一身多

1028 一ふしのねのならぬ思ひにもえはもえ神たにけたぬむなし煙を
義なしならぬおもひとは火也むなしき思の煙をは神もえけたぬと也俊成卿なるさはなと云也と也

きのめのと

1029 一あひ見まくほしはかすなくありなから人につきなみまとひこそす

れ

ほしによせて也人につきなみは人ニつきなきと也

をのゝこまち

1030 一人にあはん月のなきには思をきてむねはしり火に心やけをり

むねはしり火とはおもひの火也

藤原のおきかせ

1031 一春霞たなひくのへのわかなにもなりみてしかな人もつむやと

序哥也人もつむやとは人にけさうせられはやと也

よみ人しらす

1032 一おもへとも猶うとまれぬ春霞（おはんぬはぬ也）かゝらぬ山のあらしとおもへは

義なし心のおほくやあらんと云心也

平貞文

1033 一春の野のしけき草はのつまこひにとひたつきしのほろゝとそなく

義なし

きのよしひと

1034 一秋のゝにつまなきしかのとしをへてなそわかこひのかひよとそなく

なそ我恋のかひよとは鹿の鳴ニ付てなにか我恋のかひそと鳴と

云心也かひよとよみ切てとそとよむ也

【校異】なにか―＊

みつね

1035 一蝉のはのひとへにうすき夏衣なれはよりなん物にやはあらぬ

義なしよりなんとはもちさいみうすきぬなとのよる心也

たゝみね

1036 一かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたてしくるないと

ひそ

義なしねぬなわとは根のあるぬなは也蕙ヌナハ（ヌナハ）蓴也

【校異】蕙ヌナハ蓴（ヌナハ）也―＊

よみ人しらす

1037 一ことなくはおもはすとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる

同　玉たすきとは入ちかへてかくる也おもはゝおもはぬといは

んと也

同

1038 一おもふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよしもかな

同

1039 一思へともおもはすとのみいふなれはいなやおもはし思かひなし

同

1040 一我をのみおもふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして

同

1041 一われをおもふ人をおもはぬむくひにやわか思ふ人の我を思はぬ

ふかやふ

1042 一おもひけむ人をそともにおもはましまさしやむくひなかりけりや

は

よみ人しらす

1043 一いてゝゆかむ人をとゝめむよしなきにとなりのかたにはなもひぬ

かな

同　鼻をひくを聞ては門出せぬと也

【校異】ひく―ひる

1044 一紅にそめし心もたのまれす人をあくにはうつるてふ也

人をあくにはとは紅をおとすとそあくにておとす也

1045 一いとはるゝ我身ははるのこまなれやのかひかてらにはなちすてつる

義なし

1046 一鶯のこそのやとりのふるすとや我には人のつれなかるらん

同　ふるすとやとはふるさるゝ心也

1047 一さかしらに夏は人まねさゝのはのさやくしもよをわかひとりぬる

夏の夜は人まねにあけてもねつ冬はさむきをわふる心也

平中興

1048 一あふことの今ははつかになりぬれは夜ふかゝらては月なかりけり

義なしはつかを廿日の月なき時分によせて也

左のおほいまうちきみ

1049 一もろこしのよしのゝ山にこもるともをくれむと思我ならなくに

天竺の五台山の金峰山を云と也吉野の願文ニ金峰山を飛来したるとある也たとへもろこしにありともゆかんと云心也みわの山いかに待みん年ふともの返しを誹諧哥ニ入也

なかき

1050 一雲はれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

義なし

伊勢

1051 一なにはなるなからのはしもつくるなり今はわか身をなにゝたとへん

ふりたる身と云心也此橋作事嵯峨の御宇弘仁元年と也伊勢か世までは七十年余也ふりたる不審也條理歟と也

よみ人しらす

1052 一さめなれとなにそはよけくかるかやのみたれてあれとあしけくもなし

まめなれとゝは実法にあるも無由也なにそはよけくとはなにかよきそと也かるかやのみたれもくるしからぬと也是誹諧の本意也よけくあしけく平けく安らけく同心也

【校異】なにかよきそ―なにがかぞ

おきかせ

1053 一なにかその名のたつことのおしからむしりてまとふは我ひとりかは

義なし

［1054］

一くそ　屎也女也コソ也初音こそなと云類也

源のつくるか女也

くそ

1054 一よそなからわか身にいとのよるといへはたゝいつはりにすくはかり也

事書ニ見えたり偽とは針ニよせて也

［1055］

一さぬき　安倍清行朝臣女

さぬき

1055 一ねきことをさのみきゝけむやしろこそはてはなけきのもりとなるらめ

ネキコトヽハ神ヲイサメ申事也マツル云也アライヨネナトヲ手向事也
義なし
【校異】ネキコトヽハ神ヲイサメ申事也マツル云也アライヨネナトヲ手向事也
—＊

［1056］
一大輔　源たすくか女也
大輔

1056
一なけきこる山としたかく成ぬれはつらつゑのみそまつゝかれける
つらつゑとは物思時の体也山をのほる時杖をつく心也一たうせん万里の道を行
よみ人しらす

1057
一なけきをはこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬへら也
義なし
同

1058
一人こふる事をゝもにとになひもてあふこなきそわひしかりけれ
同　あふことは物になふわうこによせて也
同

1059
一よゐのまにいてゝ入ぬるみか月のわれて物思ころにも有かな
われてとはわりなう我思と也
同

1060
一そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきる
さに
そへにとてはさうと云事也あふさきるさとは会さま来さま也
同

1061
一世中のうきこひことに身をなけは深谷こそあさくなりなめ
義なし
在原もとかた

1062
一よのなかはいかにくるしと思らむこゝらの人にうらみらるれは
義なしこゝらは（＊）多くの人也
【校異】＊—巨々等也
よみ人しらす

1063
一なにをして身のいたつらにおいぬらん手のおもはむことそやさし
き
同　やさしきとははつかしき也万葉ニ玉しまの此川上に家はあ
れと君をやさしみあらはさすありこれもはつかしき心也源物ニ
やさしき方にはあらねとも玉かつらしてとははつかしきにあら
て也
【校異】やさしきとははつかしき也—＊　源物ニ　やさしき方にはあらねとも玉か
つらしてとははつかしきにあらて也—＊
おきかせ

1064
一身はすてつ心をたにもはふらさしつゐにはいかゝなるとしるへく
義なし　はふらさしとは物にはらちのある物なれは心をはうら
つにせしと也
千里

1065
一白雪のともにわか身はふりぬれと心はきえぬ物にそありける
義なし
よみ人しらす

1066
一梅花さきてのゝちの身なれはやすき物とのみ人のいふらむ
同　梅の実也

1067 一わひしらにましらなゝきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

猿啼山峡の題也鶴立洲の類也事書に見えたり山のかひとは法皇おはしましたるは山のめいはうのけふにてはなきかと也

【校異】めいはう—めいぼく

みつね

よみ人しらす

1068 一世をいとひこのもとことにたちよりてうつふしそめのあさのきぬ也

義なしうつふしそめとはふし染とて草衣の事也うつふしなとする

世捨人(ステヒト)の樹下石上(ジユケセキシヤウ)の体也

【校異】草衣—草花

第二十

大哥所御哥

一此所は南北ニ門あり哥とはうたひ人也舞哥音楽を司の人あつまる也音曲方也

一御哥と云可有様事也日神の御事等御代々の御事あり新(シヤウ)嘗会大嘗会等の哥あり毎年被行は新嘗会也御代のは大嘗会也

【校異】御代—御代始

[1069] 一おほなほひのうたとは大直衣(ヲウナヲイ)是群臣の集ル也宿衣(シユクイ)は夜宿直(トノイ)も(＊)夜用ル袍也(ハウヘニキル物也)直衣(チヨクイ(ナヲシ))は五節　天武御宇正月十六日舞妓(フヽキ)を始也

【校異】＊—大直日神事にしたがふものゝ居所也。一禅説也

1069 一催馬楽(あたらしき年のはしめにかくしこそ千とせをかねてたのしきをつめ)の哥をあたらしきと云也又木の説あり薪を奉ル事もありたのしきとはたのしみ也左ニ日本記にはとは続(ショク)日本記の事成へし

1070 一しもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

しもとゝは四本と云説不用つゑの名也杖三をゆい合てゆいとうたいなとのことくする也しもとは卯杖也つゑを結かつら也まなく時なくとはたのしみかつきぬ也

【校異】つゑ—杖三　杖三—杖

[1071] 一近江ふり曲(フリ)毛詩の風俗(ソク)の中ニ其国のやうたいをしらんとの事也その国のふりと也

1071 一あふみよりあさたちくれはうねのゝにたつそなくなるあけぬこのよは

義なしうねの野近江の名所也

[1072] 一みつくきふりとは土佐ニある名所也近江ニあるはみつくきのをかのみなと也

【校異】みつくきふりとは—みづくきぶり、みづくき

1072
一水くきのをかのやかたにいもとあれとねての朝けのしものふりはも
あさけとは朝明也霜のふりはもふるは也

［1073］
一しはつ山ふりとは豊前也四極と書也極の字はつるとよむ極官（キヨツクワン）
極位官位のはつる心也（＊）万葉はかさぬかひとあり

【校異】＊―執諧山、敷津山、近江也。豊前とも、くしはつとも　万葉はかさぬかひとあり―＊

1073
一しはつ山打いてゝみれはかさゆひの嶋こきかへるたなゝしをふね
（＊）

【校異】＊―笠ゆひの、万、笠ぬひと有

一神あそひのうた　内侍所のまへ也御代始せいしゆたうと云所にてあるうたひなり

［1074］
一とりものゝうたとは手に取て舞物の事なり榊幣まさき弓ひさこ等也

1074
一神かきのみむろの山のさかきはゝ神のみまへにしけりあひにけり
義なしみむろは神御座所（マシマス）也（＊）

【校異】＊―神楽の採物にては、榊の歌の末也

1075
一しもやたひをけとかれせぬ榊はのたちさかゆへき神のきねかも
しも八度は年を重たる事舞姫もかんなきも神も共にさかゆると
也（＊）

【校異】＊―霜八度は、年くにをくをいふ。八度は多き数をいふ。榊葉の常盤なるによせて、祝あひて立さかゆるとは云也

1076
一まきもくのあなしの山の山人とひとも見るかに山かつらせよ
義なし（＊）人もみるかにとは人もみるはかりとも人もみるにとも山かつらとは鬘也（＊）

名所大和

【校異】＊―とりものゝうたには、わぎも子と有　＊―まさきのかづら、額を結也

1077
一み山にはあられふるらしと山なるまさきのかつら色つきにけり
義なし

1078
一みちのくのあたちのまゆみわかひかはするさへよりこしのひくに
よりことは我方へよる心也（＊）

【校異】＊―採物、弓の歌也。やうやくよりこと有

1079
一わかゝとのいたゐのし水さとゝをみ人しくまねはみくさおひにけり
義なしひさこの哥也

［1080］
一ひるめのうたとは日神の御事也引哥
いか斗よき事してかあまてるやひるめの神をしはしとゝめん
いつくにか駒はつなかんあさひこかあさるさはへの玉さゝのう

へ

あさひこは日の事也

拾遺神楽哥

我駒ははやく行なんあさひこかやへさすをかの玉さゝのうへに

同事也日の名を白馬と申也

【校異】引哥ニいか斗よき事してかあまてるやひるめの神をしはしとゝめん いつくにか駒はつなかんあさひこかあさるさはへの玉さゝのうへ あさひこは日の事也 拾遺神楽哥 我駒ははやく行なんあさひこかやへさすをかの玉さゝのうへに 同事也日の名を白馬と申也―＊

1080 一さゝのくまひのくまかはに駒とめてしはし水かへかけをたにみむ（両所なから名所也）

日の御事なり

【校異】日の御事なり―＊

1081 一あをやきをかたいとによりて鶯のぬふてふかさはむめの花かさ

義なし同前也

【校異】同前也―＊

1082 一まかねふくきひの中山おひにせるほそたにかはのをとのさやけさ

義なし此哥は承和の御へのきひのくにのうたは仁明の御にへの事大嘗会時也きひとは吉備国也備前備中備後等也おほんむへとも一説也

【校異】此哥は承和の御へのきひのくにのうたは仁明の御にへの事大嘗会時也―＊ おほんむへとも一説也―＊

1083 一美作やくめのさゝ山さら〳〵にわかなはたてしよろつよまてに

義なし此哥みつのをとは清和也

1084 一みのゝくにせきのふりかはたえすして君につかへん万代までに

義なし此哥元慶とは陽成也

1085 一きみかよはかきりもあらしなかはまのまさこのかすはよみつくすとも

義なし此哥仁和とは光孝也

1086 一あふみのやかゝみの山をたてたれはかねてそみゆる君か千とせは

義なし此今上とは延喜也源物ニ今上（コンシヤウ）とよむ

【校異】此今上とは延喜也―＊

一東哥をひかし哥とよむ人ありあつまを用

一みちのくうたとは陸奥也

1087 一あふくまにきりたちくもりあけぬともきみをはやらしまてはすへなし

義なしすへなしとはせん方なし也

1088
一みちのくはいつくはあれとしほかまの浦こく船のつなてかなしも
義なしかなしもはおもしろきとなり

1089
一わかせこをみやこにやりてしほかまのまかきの嶋のまつそ恋しき
同

1090
一おくろさきみつのこしまの人ならは宮このつとにいさといはまし
を
をくろさき三の小嶋両所近所の名所也

1091
一みさふらひみかさと申せ宮木のゝこのした露は雨にまされり
（みさふらひ侍也　みかさ かさの事也）
義なし宮城野は東の方ははるかにて木のしけき所也西に山ある
所也

1092
一もかみかはのほれはくたるいなふねのいなにはあらすこの月はか
り
義なしはやき川也舟をやくもすれは押落也仍のほれはくたると
也いなにはあらすこの月はかりとはいやにてはなしこの月はか
りは待んと也或説ニ早き瀬を舟を引のほる時ふり〳〵とするか
人のかふりをふりていやと云ニ似たると也

1093
一きみをゝきてあたし心をわかもたはするの松山浪もこえなん
義なし誓言也

一さかみうたとは相模国也

1094
一こよろきのいそたちならしいそなつむまさしぬらすな奥にをれな
み
めさしぬらすとは菜入ル物ぬらすると也食物いるゝ物とも云め
のわらはの事を用ル也引哥ニきのくにのなくさの浜に奥ひそふあ
まのめさしのおとなゝりせは是もおさなき女をよむ哥也（＊）
【校異】めさしぬらすとは菜入ル物ぬらすると也食物いるゝ物とも云めのわらはの
事を用ル也―めさし、一説、海士のいさりするとて物どもいるゝ籠也。一
説、海藻などとるめのわらはべ也。めをさしきりてとれば、めざしと云
也。さいばら竹河の歌に、竹河のはしのつめなるや はしのつめなるや
花ぞのに我をばはなてや 我をばはなてや めさしたぐへて めのわらはべ
と云も、さも有ぬべくや。 ＊―女のわらはを用給也

一ひたちうた常陸国也

1095
一つくはねのこのもかのもにかけはあれと君かみかけにますかけは
なし
義なし

1096
一つくはねの峰のもみちはおちつもりしるもしらぬもなへてかなし
も
同　かなしもおもしろき也

一かひうた甲斐国也

1097
一かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山
さやかにみする物をと也けゝらなくとは心なく也けはこ二通五音也れはろ二通也（＊）よこほりを四郡と云貫之か土佐の日記二云男山をよこほりふせると書たり四郡の説不用横なる也（＊）

【校異】さやかにみする物をと也けゝらなくとは心なく也―けゝれなくとは、心なくと云義也。さやにみする物をと也　＊―心なく也　よこほりを四郡と云―よこほりは、横なる也。四郡にふせると云説あれど、其山さやの郡にありといへば四郡にあらず。よこほりくやると書たる本も有。くやるもふせると云同義詞と云々。　書たり―云と云々　四郡の説不用横なる也―四群をば不可用云々。　＊―貫之が日記、かくてさしのぼるに東の方に山のよこほれるをみて人にとへば、やはたの宮といふ。既、古今の撰者、山のよこほれるをみてとかける、よこほりふせるといふ歌に叶へる也

1098
一甲斐かねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん
風の行やうにあらはや人にことつてもせんと也かもやとは人にもかなやと也

【校異】風の行やうにあらはや人にことつてもせんと也―＊

1099
一おほのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはん
義なし　序哥也おふの浦は伊勢の志摩の国二あり（＊）

【校異】＊―又、長門国にもあり

［1100］
一冬の賀茂のまつりのうたとは臨時ノ祭也北祭とも云此哥をすこしひきのけて書たる本あり臨時の祭の事宇多の御門また王侍従と申せし時賀茂二狩し給し時老翁の参会て臨時の祭給はらんと申せし事あり御門は神二通して何とか被思食けん人はしらてそのまゝなりしに光孝の末の御子にて御座しか御代を治し給也さて臨時北祭は寛平元年十一月廿六日戊酉の日始て被行也時平のをとゝ使也敏行歌人也舞人十人歌人十人也延喜ノ御門父ノ御門の名御王の御事なれは当集の軸頭（チクトウ）二入事名誉也善説也可秘事と也軸頭は奥の一番事也奉水（頭）は奥の一番也可心得也

【校異】入事―＊

藤原としゆきの朝臣

1100
一ちはやふるかものやしろのひめ小松よろつ世ふともいろはかはらし
義なし名誉をほめて軸頭二入ル也

一書入ナカラ墨二テ滅哥二

［1103］
一くれのをも五しんの内と也ちもとをくれのをもと云と也

［1104］
一宮こしまへのわかれなりけりとよむ也

［1105］
一あやもち

1105
一うきめをはよそめとのみそのかれ行くものあはたつ山のふもとに
右の事書に見えたり

1108 一いぬかみのとこの山なるなとり川いさとこたへてわかなもらすな
いさや河とある本あり

1110 一わかせこかくへきよひ也さゝかにのくものふるまひかねてしるしも
事書ニ見えたり蛛糸の事前ニ書也

つらゆき

1111 一道しらはつみにもゆかむ住の江のきしにおふてふこひ忘草
義なし忘草とは萱草(ケンサウ)也
世俗にくはん草と云也

【校異】世俗にくはん草と云也—北堂に植草也。忘憂草也

一真名序の事御家本ニなし但貞応弐年の本を以テ御講尺ありしニより
少々被仰し也

(＊)

【校異】＊—是以逸者其声—、是以ト云ハ、次上ノ人世—、形於言ト云言葉
指也。易遷相変ユヘニ声吟悲アリト也。生於志形於言、故ニ述懐発慣と
也

一混本とは旋頭の異名也此外ニ援頭(クワントウ)と云もありあさかほの夕かけま
たてちる花なれや五七七斗の哥也

一大津皇子とは天武の第三皇子也始て詩賦を作とは風紙天筆画(フウシテンヒツエカク)ニ雲
龍(リヨウ)一山機雲抒織(サンキウンシヨ)ニ葉錦(キン)一此詩事也

【校異】大津皇子とは天武の第三皇子也—自大津皇子之初作詩賦

一乞食之客とは三方の沙弥つたをして人の門外ニ立其家内ニ人の琴を
引を聞て哥を詠してつたをもせすして帰し也
ことならはあるしと共にえてしかなねはしらねともひき心みん

一軽情(ケイセイ)とはほめたる心也

一九載とは九年也シウノ世ハ載也ケンノ世ハ年也カノ世ハ歳也タウ
ノ世ハ祀(トシ)也如此其代々ニ年を各用之

【校異】其代々ニ年を各用之—代々用と也

一渕変より洋々満耳までの二句淑望はえかくし[ママ]父長谷雄卿の作歟と
也紀納言(キタウケン)の事也

【校異】渕変より—砂長為巌之頌　までの—此

一相将大臣大将の事也

一秋津洲の事神武天皇廿一ニ高山ニ昇て日本を見給ニ国のなり蜻蛉(セイレイ)の
居たるに似たり此虫を秋津と云也仍秋津洲と云也東へむきてある
ニよりてとうはうと云付てと也世俗ニとんはうと云虫の事也

一当集奏覧の事四月十五日とあるを十八日ニ始て詔ありしとあるち
かい也巻軸ノ席就(テウジユ)とあり調たる心也貫之を承香殿ニ召て仰らるゝ仍

貫之集ニ
ことなつはいかゝありけむ時鳥このくれはかりあやしきはなし
十八日は上奏の日也基俊成卿共ニ此分也七条の后は延喜七年ニ薨給
也

注(一) 長享三年四月十四日ニ御講尺終也

注(二) 古今和歌集序　紀淑望

夫和歌者託ニ其根於心地一ニ発ニ其花ヲ於詞林一ニ者也人之在レ世
不レ能ニ無為一コトニ思慮易レ遷哀楽相変感ニ生於志一ニ詠
彰ニ於言一是以逸者其声楽怨者其吟悲可ニ以
述レ懐ニ可シ以発レ憤動ニ天地ヲ感ニ鬼神ヲ化ニ人
倫ヲ和ニ夫婦ヲ莫レ宜ニ於和歌一ニ咏歌ニ有ニ六義
一・一ニ曰ク風・二ニ曰賦・三ニ曰比・四ニ曰ク興・五ニ曰ク雅・六ニ曰ク頌
若下夫春ノ鶯之囀ニ花ノ中ニ秋ノ蝉ノ吟中樹上ニ雖レモ無ニ曲折一各
発ニ哥ノ謡一物ノ皆ナ有レ之自然之理也然レ而神世七代
時ニ質人ト淳情欲無レ分ツコト(クコト)倭哥未レ作逮下于素戔烏
尊到中出雲ノ国上ニ始メテ有ニ三十一字之詠今ノ反哥之作也
其ノ後雖ニ天神之孫海童之女一莫レ不下ト云コト以ニ和歌ヲ通レ
情上者也爰ニ及ニ人ノ代一ニ此ノ風大興長歌短哥旋頭混本之類
雑躰非レ一ニ源流漸ニ繁シ譬猶下払雲ヲ之樹生レ自ニ寸苗之煙一
浮レ天ヲ之波ノ起レ於中一滴之露上至テハ如下ニ難波津之什献ニタテ
天皇一ニ富緒川之篇報中太子上ニ或ハ事ヲ開ニ神異一或ハ
興ヲ入ニル幽玄一ニ但シ見ニル上古ノ哥ヲ多ク存ニシテ古質之語一未レ為ニ耳
目之ノ翫ニ徒一為ニ教誡之端一古
天子毎ニ良辰ノ美景ニ詔ニ侍臣ニ預ニ宴筵一者ノ献ニ和歌ヲ
君臣之ノ情ニ由レ斯ニ可レ見賢愚之性於レテ是相分ル所以下随ニ民之
欲ニ択中士之才ヲ也自下大津ノ皇子之初作中詩ニ賦上詞ニ人才子慕レ風ヲ継レ
塵移ニシテ彼ノ漢家之字ヲ化ニ我日ニ城之俗一民業一改和哥漸ニ衰
ヘ(フ)然トモ猶有ニ先師柿ノ本ノ大夫ト云者(云ヒト)高ク振ニ神妙之思ヲ独リ歩ニ
古今之間ニ有リ山ノ辺ノ赤人ト云(云)者一並和哥ノ仙也其ノ余ニ業ニ和
歌ヲ者綿々トシテ不レ絶ヘ及下彼ノ時ニ変澆漓人貴中奢淫上浮詞雲ノ如ニ
興ヲ艶流泉ノ如ニ湧其実皆似落チ其花孤ニ栄至レ有下好色之家
ニハ以レ此為ニ花鳥之使一乞食之客以レ此ヲ為中活計之謀上故
者纔一二三人然長短不レ同論以可レ弁花山僧正尤得一
哥躰ヲ然其ノ詞花而少シ実如シ図画好女徒動ニ人ノ情一在原
中将之歌其ノ情有レ余其ノ詞不レ足如レ萎花雖レ少ニ彩色一而有中薫
香上文琳巧レ詠レ物ヲ然其躰近レ俗如下賈人之着中鮮衣上宇治山
ノ僧撰喜ノ其ノ詞甚花麗而首尾停滞如下望ニ秋月一遇中暁雲上
小野ノ小町之歌古衣通姫之流也然艶而無ニ気力一如ニ病婦之
着ニ花粉大友ノ黒主之歌ハ古猿丸大夫之次也頗有ニ逸興一而躰甚
鄙如ニ田夫之息ニ花前ニ也此外ノ氏姓流聞者不レ可ニ
勝数一其ノ大底皆以レ艶為レ基不レ知ニ和哥之趣一者ノ也俗人
争事ニ栄利ニ不レ用レ詠ニ和歌ニ悲哉々々雖下貴兼ニ相将一
富余中金銭上而骨未レ腐ニ於土中一名先滅ニ於世上一

適為二後世一被レ知者唯和歌之人而已何者語近
人耳義慣神明也昔平城天子詔侍臣
令レ撰二万葉集一自レ尓以来時歴二十代一数過二百年一其
後和歌弃不レ被二採用一雖風流如二野宰相一軽情如在納言
而皆以二他才一聞不以斯道顕陛下御宇于レ今九
載仁流二秋津洲之外一恵茂二筑後山之陰一渕変為レ瀬之声寂々
閇レ口砂長為レ巌之頌洋々満レ耳思二継既絶之風一
欲レ興二久発之道一爰詔大内記紀友則御書所預紀貫
之前甲斐少目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等
各献二家集并古来旧歌一曰二続万葉集一於是重有レ詔部二類
所レ奉之哥一勒為二二十巻一名曰二古今和歌集一臣等詞少二春花之艶一
名ハ竊二秋夜長一況哉進怨二時俗之嘲一退慙二才芸之拙一適遇二
和哥之中興二以楽一吾道之再昌嗟乎人麿既
没和哥不レ在レ斯哉于レ時延喜五年歳次二乙丑四月十五
日臣ノ貫之等謹序

注(3)
第一春上六十八首　第二同下六十六首　第三夏三十四首
第四秋上八十首　第五同下六十五首　第六冬二十九首
第七賀二十二首　第八離別四十一首　第九羇旅十六首
第十物名四十七首　第十一恋一八十三首　第十二同二六十四首
第十三同三六十一首　第十四同四七十首　第十五同五八十二首
第十六哀傷三十四首　第十七雑上七十首　第十八同下六十八首
第十九六十八首短哥五首付返一首旋頭四首　誹諧五十八首

都合千百首

返哥十六首　読人不知哥四百五十七首但二十二首若注
万葉哥七首　新撰哥二百七十七首
後撰哥六首　拾遺哥十四首
神楽哥七首　催馬楽哥四首
伊勢物語哥五十首　大和物語哥十四首　両語共入哥五首
三十六人撰哥廿九首　金玉集哥十九首
寛平菊合哥五首　朱雀院女郎花合哥八首　先後合
寛平后宮哥合七十七首　惟貞親王哥合哥十五首但一首中宮
貞文哥合哥五首　亭子院哥合哥二首　延喜十三年
大井行幸哥二首　延喜七年

作者百廿五人　男八十九人　僧十人　女廿六人

天皇　親王
平城天皇一首　仁和天皇二首　常康親王一首
惟喬親王二首

大臣
前太政大臣一首　菅々二首　東三条左大臣一首
河原左大臣二首　近院大臣三首　具左大臣二首

公卿
国経卿一首　行平卿五首　篁卿六首

仲丸一首

追至公卿

定方一首
菅根一首

諸王付賜性

兼覧四首
登一首

広人

清行二首
後蔭一首
忠一首
篤行一首
淑望一首
淑人一首
良香一首
今道三首
忠行一首
美材二首已上五位
長盛一首
是則七首
名実一首
興風十七首

仲平一首
兼茂二首

景式二首已上諸王
宗于六首已上賜性

敏行十九首
春風二首
貞樹一首
実一首
中興一首
貫之九十八首
有朋二首明歟
清樹二首
元規一首
経覧一首
人真一首
深養父十六首
友則四十五首
朝康一首

兼四首

業平廿九首

有常一首已上四位
忠房四首
当純一首
棟梁四首
貞文九首
関雄二首
利貞四首
滋蔭一首
秀岳一首
良風一首
利春一首
康秀五首
千里十首
烈樹三首

黒主三首
峰雄一首
惟幹一首
忠岑三十五首
惟岳一首
良名一首
大頼二首
宗貞三首

僧十人

遍昭十四首
幽仙二首已上僧倡
素性四十三首
神退一首已上凡僧

女二十六人付尼

二条后一首

滋春六首
勝臣三首
有輔二首
万男一首
望行一首
秋岑二首
雄宗一首
仲樹一首

聖宝一首
真静二首
承均三首

伊登内親王一首

廣女

三条町一首
治子一首
寵三首
讃岐一首
大輔一首
千古母一首

直子一首
三国町一首
因幡一首
二条一首
伊勢廿二首
久曽一首

元方十三首
言直一首
躬恒五十九首
忠臣一首
高世一首
篤行一首
有季一首已上六位

勝延一首
兼芸三首
喜撰一首

閑院女五宮一首

因香四首
紀伴乳子二首
兵衛二首
有常女一首
閑院二首
陸奥一首

乙（ヲト）一首　小町十七首　小町姉一首
白女（シロメ）一首　尼敬信一首

兼註作者十一人

天智天皇一首　平城天皇二首　前太政大臣一首
橘清友一首　人丸八首　中臣東人（ナカトミノアツマウト）一首
黒主一首　三人翁（ミタリノ）三首　高津内親王一首
近江采女二首　斉宮一首

墨付百枚

注

（1）河野本・朱書本では、真名序注の前に「長享三年四月十四日御講尺終也」とあり、次いで「此書飛鳥井蓮心院殿御講尺之説　不許他見　源尚長　判（朱書本は花押）」「此一冊不適相伝比於盲亀浮木者也　不叶冥助者何可随身哉可謂過分已　源堯清（朱書本は花押）」の識語がある。為和本・東山本は京府本に同じ。

（2）真名序は京府本以外の伝本には付されない。

（3）歌数・作者一覧は、京府本の他に為和本にも付されるが、これと同系統の本文を有する東山本にはみられない。

〔付記〕本稿をなすにあたり、資料の閲覧及び翻刻の許可を戴いた京都府立総合資料館に深謝申し上げます。

（ひだか　あいこ・本学大学院博士後期課程）